

まど・みちおの詩・童謡

——日本児童文学の詩史を変える新しさ——

谷 悦子

一九九四年、まど・みちおは、児童文学のノーベル賞といわれる国際アンデルセン賞作家賞を、日本人として初めて受賞した。これは、アジアにおいても詩の分野においても初めてであった。戦後ほぼ五十年めに、日本の児童文学は、世界に通用する作家を誕生させたのである。

二年ごとにこの賞を選んで贈るのは、IBBY（国際児童図書評議会 International Board on Books for Young People）であるが、その日本支部JBBYが、まど・みちおを日本候補として最初に推薦したのは一九九〇年であった。一九八八年に出版された拙書『まど・みちお 詩と童謡』（創元社）がきっかけになったことから、国際選考委員会に送る資料「まど・みちおの紹介文（作家・作品論）」（英訳はサイモン・ピゴット氏）は、私が担当した。この中で、「まど・みちおの詩・童謡」の特質（独自性）を、次の三つの観点で捉えた。「第一は、ユーモアやナンセンスといった子どもの心を解放する笑いの世界。第二は、人間だけではなく地球上の全てのもが自分であることを喜び、

他者と共生していくという理念を形象化した点。第三は、はるかな時空に憧れるコスモロジカルな想像力」である。そこで、本論考でも、この三つの観点から、〈日本児童文学の詩史を変える新しさ〉を、まど・みちおがどのように切り開いたのかについて論じたい。

一、笑いと楽しさ——娯楽性

まど・みちおは、一九三四（昭和九）年、『コドモノクニ』に投稿した「雨ふれば」「ランタナの籬」が北原白秋に認められて詩・童謡の世界にデビュー。その後、白秋門下の詩人たちと同人誌『昆虫列車』を創刊し、戦後につながるまど独自の世界を展開する。特に注目すべきなのは、童謡論「童謡圏」である。〈童謡は児童の求めに適合した娯楽性をもつ児童へのよき遊びの贈り物であり、大らかな芸術眼と俊烈な批判のメスで、言葉嬉しい作品に具体化された娯楽的文学であるべきだ〉といい、「ナンセンスや、おどけや、頓狂や、無茶騒ぎ等のかしさを、理屈なしの、